



門卷 奇俠客傳

第一集



四

3157
9



又長
 質
 凡
 〇

開卷驚奇俠客傳第二集卷之四

東都 曲亭主人編次

第十七回 滿泰駕を駐めて壯士と見る 助則馬を走して奸黨を捕ふ

話表伊勢國司北畠三右衛門督滿泰卿の日の先妣を氣の天人北畠頭泰の室四條野相
 隆俊 せうげんまを
 ののの祥月忌辰をりけり香華院へ參詣の例儘と準備の秋明の時候と
 伴當居る從へく氣の城を去る野邊の朝立の雨を有る路草の露拂の
 志のの野井の地蔵の頭も年尚弱冠一個の武士俱全小厮を遣離し袴の袴を
 する路の泥主と厭氣もく滿泰卿の轎子の立向の声高き今日這野邊の
 國司北畠殿を下中途の推參不敬不似され大夏の許已と云ふ轎子の附を欲
 を姑且留るるかと吸すわが近着ける思ひをわらるれば轎子隸の老黨若黨を



俠客傳第二集卷四

東都 曲亭主人編次

13
3157
9

何事と駭かす推退けんとせける。満泰靈妻時と喚林彦。何人我知れども大事の
訴訟あり。この轎子と駐まらん。快々仔細を聞き。速の指揮あり。この光
黨声ゆり立て。先姑且留り。喚られ。皆齋一後方とせ。その佐列を乱さ
お主居。登時一個の青侍小六が身邊。走り來。対ひ。執視て。和殿を何
処の人民。目今何もの直訴あり。姓名宿所。夙意の趣且。御説具。小京
上。これ。小六を合。伏して。仰。備身の團司と舊縁あり。嗚乎。を。と。い
ども素生と明。新田の一流。綽約。大人の由縁。連小六と喚。彼。この。這年来
東園。人。成り。知。召。身。着。證。據。の。腰。短。刀。液
を。推。立。て。這。個。後。村。上。天。白。馬。脇。屋。刑。部。御。儀。賜。り。た。る。菊。一。文。字。の。御
劍。之。這。義。の。團。司。も。口。碑。よ。知。食。を。在。る。是。を。御。覽。入。其。疑。ひ。即
坐。釋。の。餘。の。一。説。の。見。參。る。人。物。陳。々。か。這。意。も。披。露。願。の。と。の。余

件。の。青。侍。の。沈。吟。し。點。頭。て。念。の。短。刀。と。某。姑。且。預。り。て。其。披。露。の。下。と。答。る
躬。て。短。刀。と。受。合。り。う。遠。く。轎。子。の。頭。の。ま。の。小。六。が。ひ。つ。趣。を。箇。様。々。と。傳。へ。わ。げ。て
那。短。刀。と。名。ま。り。れ。ば。満。泰。听。々。の。令。を。現。這。菊。一。文。字。の。御。劍。の。准。后。親。の。日
記。寫。され。俺。も。年。來。知。れ。今。ゆ。々。疑。々。に。傳。れ。那。其。仗。の。脇。屋。義。隆。の。餘。類。を
と。證。據。既。小。分。明。之。對。面。せ。る。あ。ら。ん。登。見。と。建。き。と。詞。々。と。宣。示。し。又。短
刀。と。青。侍。と。遞。与。し。轎。子。と。出。ぬ。青。侍。の。傍。小。六。が。身。邊。赴。り。て。團。司。對。面。せ。り
る。氣。色。を。既。し。と。知。り。短。刀。と。返。け。る。小。六。が。身。邊。赴。り。て。團。司。對。面。せ。り
氣。色。を。既。し。と。知。り。短。刀。と。返。け。る。小。六。が。身。邊。赴。り。て。團。司。對。面。せ。り
守護。と。魏。々。堂。々。と。威。羅。列。を。中。に。満。泰。主。小。六。を。相。て。登。見。と。放。ち。揖。讓。し。て
此。れ。と。招。る。小。六。一。声。何。と。答。へ。朝。に。跪。ひ。て。逆。旅。の。浪。人。の。料。を。尊。尊。駕。を
犯。と。大。胆。と。忠。訴。せ。と。請。稟。せ。る。幸。ひ。と。退。棄。られ。其。速。に。對。面。と。允。さ。る。と

東園傳第二冊卷四

二

分小過ら願ふ見見す着ぬひ。みろ泰點頭て。あつふ許しぬか。と応て備えん
かてておよ賓客。圓坐と快薦めを。そのせし小六を推禁め。その受の許しを
中途の所望と海谷せられ。意表と陳るるもまた死管待ひ。且忠訴の趣と聞召容
らば。みろ先祖を名生ん。恥かぢし所ゆれぬ。その意を母せられ。晩生苟もその
後とて南北兩朝御合體あり。後稍人と成りぬ。君父の與の忠孝を盡し。まろ所せし
の故と去歲の夏初て西に赴きて。秋も吉野を杖を駐め。後醍醐後村上兩天皇の宮儀を
仕まつといぬ。日まもひ。國司の南朝歴代の播紳文武兼備の死家柄也。祖先の餘
光今もる。赫赤火とく衰ぬる。唐山姫周の朝鮮は伯仲せぬ名家よとせ。いづれを安
不吉と訪す。あせと故ふし。を知らず。けしき起り。御吉野の花の高峯と立去り。まろ
當所は東島折人の噂す。あせ。尤不平の一事あり。その故の箇様々。と稻城の女兒信
夫が。その親丈作守延。愁訴并は横死の。始より終まで。その崖略と演説と。あ

美の君も豫より聞食する。信夫の孝女の言えぬ。且守延の養父也。晩生が妹也
夫婦甲乙が女兒も。年七才の時。牙人より拐され。守延が料を極ひ。命りたり。その
縛の趣。今番初て。知りぬ。信夫の晩生が。妹母の女兒也。故あり。晩生見
と稱。妹と唱へ。骨肉の中も異ぬ。自他七歳の秋九月。共侶の生育あり。あせ
要の。のる。信夫が。実の二親の世を去り。比より。他が。所在と索ねんと。思ひ。來場
此地あり。料も稻城の孀婦老樹。名告あり。信夫が。も。信夫の。と。夢知ると。なる。え
より。忠訴の。一條。御家臣木造木子。泰勝。子。奪略れ。信夫と。合復し。と
且泰勝。子。數。信夫が。養父守延の。復讐の。願ひ。を。忠訴と。稟せし。亦是。國司の
死與。善と。彰。悪と。誅。國家の。法度。を。糾。本州の。治。朝未明。の。歌。店。と。出。て。氣の。城。を。折。幸。い。這。里。中。御。意。を。是。性
急の。二。得。外。泰。勝。を。召。捕。て。這。美。を。糾。の。陳。る。辨。舌。來。此。の。權。威。憚

信夫の忠孝を盡す。泰勝の奪略を糾す。朝未明の歌店を出て。氣の城を折る。幸い這里中御意を是性急の二得外泰勝を召捕て這美を糾の陳る辨舌來此の權威憚

りでその意を聲を勇士の魂世に又傳言かぬ。其の量も奇く頭を側聞せ伴當
 們の面を照し自ら注し、俺君侯の死理會のゆゑをいひ、満泰まはさすと
 して眉をうち頻りていへる趣あるる。御宗稻城守延が女兒の性方と索難て
 こそ未造泰勝の所為と告訴せし折則泰勝を召問て、然而對決及びり。素
 素より證據あるを、只守延が推量の臆説と争何れせん。とを説き退け、訴
 状を返せし又守延が横死の光景ある山賊の所為と、地方の民が稟言する有
 司の命、夥兵を出して緝捕し由断る。かどいふも、その賊を獲、然るを和殿を御
 りて、又泰勝を敵とせんと、中途の噉訴大人氣を、正に證據あるを、狂人を趕
 んとして、不狂人も走るふ似し。誰の疎忽と、いふに、思ふに、優とあり、と、鷹揚の
 容めて、既立す、せし、と、小六を、要時と推禁めて、御説で、いふ、と、晩生他御の人と、
 若駕と犯を訴し、證據多くて、聽し、人、那泰勝が、隱匿、則他、家の、若黨、山勝、杉内

奴隸敵介、這個二名の招了也、絆既、分明、その故、箇様々々と、地藏堂の、乾井の内、
 捕執、措な、顛末、と、詞、さう、演説、くる、疑、思、い、俱、たる、小、断、を、案内、に、充
 死、伴、當、を、遣、され、牽、出、さ、て、尙、甘、鄙、語、の、論、より、證據、今、い、う、辯、及、ぶ、か、ら、な
 かる、向、せ、の、ま、と、り、れ、て、満、泰、驚、き、羞、て、あ、ら、ん、俺、行、堂、鳴、平、行、堂、の、ま、ち、ぬ、と、吐、き、
 邊、く、伴、當、を、さ、ら、で、英、虞、將、曹、明、星、三、郎、若、們、の、那、里、る、十、字、仏、堂、快、赴、り、連
 生、不、生、拘、り、れ、る、罪、人、們、を、牽、り、て、來、よ、快、々、と、火、急、の、主、命、義、り、ぬ、と、心、も、果、を、多、身、を
 起、す、伴、の、二、名、の、雜、色、奴、隸、を、相、從、々、然、而、庶、吉、と、案内、の、地、藏、堂、來、て、た、れ、の、野、井、の、
 石、と、蓋、と、の、那、杉、内、敵、介、の、這、井、の、内、か、と、庶、吉、が、い、ふ、大、家、あ、ら、ん、と、石、と、拾、ん、と、
 とも、些、も、動、さ、ら、な、けれ、ば、絆、の、肇、は、這、石、と、誰、か、拮、捍、あ、ら、ん、と、回、へ、庶、吉、微、笑、て、敢、入、り、
 素、わ、い、俺、東、人、の、い、ち、ら、ま、て、合、も、卸、も、あ、ら、ぬ、と、大、家、駭、呆、れ、て、然、り、和、郎、が、御、主人、の
 什、麼、幾、人、の、ち、ら、や、あ、ら、ん、と、い、ふ、ま、ら、ん、と、自、感、と、あ、り、け、し、却、已、た、わ、ら、ぬ、大、家、齊、一、立



天正十一年三月廿一日

伊勢



此の如くも心もみらぬかたは
こころみちのせのらうと
小六途謁伊勢国司
ひまわりをまきまきとありて

伊勢

伊勢

小六

有像第三

伊勢国司

伊勢国司

懸りかき勅し辛しと。幾石も命を捨て。城内に敵の軍を出し追立て。馳て園司の面前に
 推展の儀々と。稟と素と相と。奴隷の遠く退て。非常と成るも。まかりけり。介程の相
 内と敵介の思ひ。既園司の面前に。牽居られたる。驚怖れ膝折布て。頭を
 ぶらり。小六も然と。さうら對ひて。され。城内敵介の。又。面前を。今一度。向の如く。招了せま
 快の。と。責ら。勢ひ。脱れ。られ。個。悪僕。們。の。多く。即。使。主。の。泰。勝。の。悪。事。の。趣
 送。り。具。招。了。ま。けれ。園。司。の。小。六。を。さ。り。て。任。和。殿。の。拵。は。黒。白。分。明。る。泰
 勝。が。罪。遣。る。げ。先。妣。の。忌。辰。の。日。は。俺。身。願。其。火。焼。香。せ。ん。と。這。處。来。來。れ。も。料
 ども。殺。伐。の。詮。議。不。淨。と。帶。え。の。香。華。院。赴。け。り。這。里。より。城。小。立。た。り。即。使。木。造
 泰。勝。を。召。捕。し。禁。獄。せ。且。よ。の。意。と。ゆ。れ。と。れ。小。六。も。此。も。礙。議。せ。仰。り。白。り
 ひ。も。倘。事。違。々。と。泰。勝。が。悪。事。露。頭。と。知。ら。る。と。遂。電。を。と。り。入。余。ら。信。夫。が。お。て
 走る。亦。從。去。の。殺。し。も。あ。る。願。い。這。里。より。晚。生。小。檢。校。金。使。を。添。さ。り。牽。せ。り。又。馬

と。雜。兵。十。名。許。借。し。ぬ。使。使。と。泰。勝。の。宿。所。騎。着。け。搦。捕。て。信。夫。を。殺。し。り。の。の
 と。許。容。あ。れ。か。と。園。司。の。諾。ひ。壯。多。か。る。勇。士。の。神。速。之。の。美。定。小。六。は。一。身。和
 殿。二。騎。也。と。ぞ。那。首。小。赴。江。泰。勝。主。僕。を。疑。ひ。て。防。戦。小。及。人。殺。す。の。是。由。の。事。知。る
 べ。泰。勝。の。父。木。造。親。政。の。日。阿。射。賀。遣。り。目。今。宿。所。在。る。と。い。ふ。事。從
 類。家。僕。を。召。す。り。と。和。殿。小。借。を。東。西。あ。り。と。論。と。近。習。小。吟。附。て。轎。子。の。内。小。借
 れた。木。夾。一。枚。合。寄。て。あ。る。非。常。の。折。一。人。たり。も。俺。幹。人。等。の。與。の。符。契
 小。當。家。相。傳。の。烙。字。の。俺。身。外。出。の。折。と。も。必。ず。の。内。一。枚。と。轎。子。の。容。さ。り。隨。身
 あり。這。里。在。る。泰。勝。主。僕。相。拒。む。も。是。を。出。し。示。し。皆。謹。て。兼。伏。せ。奴。等。が。殿
 畧。あ。ら。う。と。告。示。し。木。夾。と。通。与。し。又。英。虞。兵。將。曹。と。兎。兎。の。側。に。召。さ。り。汝。等。連
 生。と。共。侶。雜。兵。を。相。從。て。快。泰。勝。が。宿。所。赴。け。明。星。三。郎。の。惡。僕。們。を。牽。引。せ
 俺。が。迹。より。城。内。へ。お。て。ま。る。べ。這。處。の。の。儀。と。拵。て。小。六。を。別。と。告。て。許。し。ぬ。と。轎。子。を。移

日影の辰過てみゆまき春の花の草る方へ繰返さ伴當居先立後限
 路真長を氣城投てかき。間隔て明星三郎の奴隷を索し合ひたる。杣内と敵介を追
 立々々共侶の舊來一方へ赴ける。中へ英貞將曹の土居で主の轎子と自送の泉て
 稍身と起し。小六の對ひて檢取使の奉りよき。香焚きし。手乗馬と鑓奴牽
 寄きと卒と。小六の遞手への登時小六を將曹と雜兵の旁ひて。遙後方へ
 なる。疾吉を召近着て。瘁の趣態々と。這里より去向と指示し。汝ハ馬の附々。英
 貞手從ひて。俺投て不到。と。この將曹のうり對ひて。那木造の宿所を問ふ將曹
 答て。泰勝の父親政と同居也。と。芥陝巷の居宅在り。又三子蚊の里の別莊あり。其
 里の起臥する日。と。孰の案内を致んや。と。小六を眉根と頼申ゆ。本宅別莊不所
 あり。泰勝の在る処を杣内敵介問へり。然るに。知りて。脱落ゆけ。什麼泰勝を
 日勤るや。と。問へ。將曹頭と掉て。否。日勤るひ。と。這月の某日。と。病着あり。と。

の。その在る処。知りた。と。小六を沈吟と。あ。と。三子蚊の別莊へ赴く。願ふ小
 那泰勝の畧奪を隠し措く。信夫を父母と俱在る。本宅と憚る。ん。況病着。推
 けて。うち替り在る。何処へ。赴く。件の里。何処を。と。問へ。將曹點頭て。亮查定不
 する由あり。那別莊。這野邊より。約莫廿四町あり。その路筋。結々。箇様々。み
 最町。寧ろ。差示。と。小六を。听。記。憶。と。と。と。路次を。と。と。御免あれ。と。揖讓。し。馬小
 うち。兼。り。鎧。と。蹴。立。て。甘。奪。地。小。走。る。其。雜。兵。并。小。麻。吉。を。皆。後。れ。と。口。正。信。し。と
 喘。々。を。趕。さ。り。ける。話。分。兩。頭。介。程。不。木。造。木。不。泰。勝。の。嚮。信。夫。を。奪。ひ。折。父。内。匠
 親。政。の。新。城。修。造。の。惣。執。吏。を。向。射。賀。の。里。へ。赴。け。て。久。く。還。ら。所。の。け。れ。も。母。親。不。ま。さ
 深く。秘。し。七。三。十。蚊。の。里。を。別。莊。の。腹。心。の。奴。婢。を。諫。て。ち。潛。せ。て。折。々。と。信。夫。と。挑。り
 か。の。素。よ。の。考。烈。堅。固。る。妙。る。れ。罵。辱。め。て。日。數。経。れ。る。從。ひ。追。ひ。自。殺。す。方。不。覺
 期。の。懲。り。心。長。閑。く。日。毎。不。術。と。言。科。を。替。る。本。意。と。遂。ん。と。尋。思。と。つ。り。日。の。病

病ひの假うつげ托たたく將しやう息いきの與よと唱なて夜よも目めも千せん蚊ぼの別べつ莊じやう在あり。きよの醫い師しの誨をる那な山やま瀬せを
 獲えまき厚こうく宗そう若じやく黨たう杜と内ないのあろるさて奴やつ隸れい敵てき介け共とも侶りの山やま瀬せせよと今朝けさ未ま明めいも近ちか
 此こ高たか峰ほう遣つたる。介け後ごの泰たい勝しやうの獨ひとりは之これをさうさうまがたの那な山やま瀬せの即すなはち
 とも。這こ頭づの山やまの東ひがし西にしの勞ろうと功こうをゆゑかへ。けふ且また術じゆつを以もつて信のぶ夫おのが親ちやう守しゆの横よこ
 死しのよと報つひ知ちと靡ひふ為ために力ちから盡つくて仇あひを穿あぬ金かねの敷うち果はると怨うらみもさるるさるる
 いふ必かならず親ちやうの與よに俺おれをさうさう做なさんや。這こ計けい畧りやくの捷せつ徑けい也や孝かう女にょの心こころを弱よわく做なさんとの即
 效こうの山やま瀬せの優ゆう劣じやくのあるのあるん嗚あ乎あ介けと肚はら裏うらの處ところ致いたす決きまりけふ日ひ屈くつ信のぶ夫おのが
 隠かくく措おく矮わい樓ろうに登のぼりて視みふ信のぶ夫おのの衣えをさうさう被おひて臥ふす睡ねりもせむ涙なみだ流ながる塗ぬ枕まくらの
 裏うら見みの曝はく布ふも外ほかるる容よう顔がん毎まい愁しゆひひ合あて雨あめは惱なやむ漁いさな村むらの柳やなぎ風かぜ傷やぶる露つゆ台たいの花はなも是
 尖ま優ゆうきと看み惚ぼれる泰たい勝しやうを枕まくら方はた寄よ添そひ耐ためて然しか而しても日ひ守しゆ延えんの横よこ死しの趣そと
 箇こ様さま々と実まこと事こと虚うそ談だん口くち信のぶと報つひ知ちり又またさう是これの事ことを那な折せ快かつ知ちせんと思おもひたる。

只ただ山やま賊ぞくの所ところ為なるとの事ことを以もつて仇あひの安やす定ぢやうするに歎なげかざるも胸むね苦くるまふけふも黙もく止しせし心こころ
 ひちち俺おれの靡ひふるの山やま賊ぞくは是こゝに俺おれの父ちちの冤えん家け之これ樹じゆを伐き草くさを其その梯はしひも索もと求もとめぬ怨うらみを
 復またさん然しかども心こころの後ごをさうと身みの悪あく事ことの外ほかを思おもは被おひ口くち説せつけし信のぶ夫おのの親ちやうの横よこ死しの事ことを
 穿あぬる堪たむ吐つ嗟あと叫こゝろびて身みを起たて又また伏ふ沈しんむ駭おそ嘆たん悲かな泣なみだ量りやうの憂うれ苦くるま流ながる涙なみだも雨あめより
 敏とししく声こゑを惜おぼしむる泣なみだにオホい返かへりて頭かぶを拾ひろひて蛾が眉まゆを逆さか建た星せい眼がんを睜ひらけ
 して信のぶと泰たい勝しやうを疾はや視しし声こゑを戦いくさと怨うらみや武ぶ弁べんの奸けん賊ぞく良りやう家けの婦め女にょも更さら奪うばて恥ちを知る綺き
 語ご艶えん談だん只是こゝ人ひとを苦くるあて身みの樂がくと做なさんや俺おれの親ちやうの死しにけふも秘ひして更さら因いんがき
 為なる死しと重おもいといつ義ぎ理り歎たんを斬き心の白しろ物もの女にょとめ悔くら返かへりて悔くら悔くら鳴な乎ある
 多おほ家けの大人おとな俺おれ身みの所ところ以もつて心こころを苦くるめ夜よを犯とがして命いのち果は敢あるるあけい脚あし道みち未ま
 了しを痛いたまけれ何なにとせんさう腸はらを割きり孝かう女にょの哀あは情じやう物もの狂くるま猶なほも奴やつが奴やつの危あや
 け又また泰たい勝しやうの対たいして俺おれ父ちち身み故こりあひる汝なんぢが殺ころすあはれも汝なんぢが悪あく事ことの故ゆゑも身みの危あや

此を又つてその禍は遇のべの然り則汝のあつて知らずと罵りて泰勝を備ふ措たる。腋挿の短
 刀を撥合りて身と起しと抜放さんとてける。泰勝透き打落しと腕合をて動せ怒
 罵る声ゆり立て噫物々あは腐女奴うち靡せんと思ひて心長閑く慰めこれ思の情も辨へど
 ととの依りて允えそのまゝと結切り足を敷系にて本意を遂入這方へ来とと被立
 立と角と女子のりりふ克くもわされが稍振放ち搔潜りとも脱る方必死の覚期
 身と汚されと矮樓る欄干の衝と足踏かけと跳場ら栽稠の間へ控と落らける。這咄咄
 奴婢四五名庖福のなまろ走出て相れ信夫の巻石の膳とて撲けん。息絶る光景も茶
 水と罵諷と泰勝の矮樓より直下ら声とけてや然る謀を隠藏東西へと納戸へ
 引入れて術幹とせまると諭さる。みづろ其処へ赴きて又勅へさまふて活き日屋屬の心書り画
 餅あやると吟ら今わ短慮と後悔の額と病と忙然る胸安らとせむら信彦折
 ぐ。連小六助則の獨駿馬の鞭と鳴らと子紋の里る泰勝の別社へ来られぬと下て

門内馬を牽入れ証系留めて呼りもせ杖入る一家見の奴婢の成信夫が即死を聚謀せ
 く納戸のなまろ在り外ものまろ一六六と四下と看回す泰勝樓も人のとちやなく吟ら
 えと泰勝あんと猜する。その機を臨みて此も猶豫せぬ忽地と声とかけと木子殿在る
 木子殿木子殿と喚らと泰勝の胸安らと思ふ思の折と名と喚れて心とあは心との答
 小六と突然と矮樓へ登り来られ泰勝駭訝と怪や和殿何人ぞと問せも果も折らる
 小六と乞と向ひて知とせ俺の國司の使者連小六と喚做る原是東國の浪人末造泰勝
 罪悪ありその車露路頭不及び一六六則國司の密意を儘と俺を捕入與ふ来れり。覚悟せよ
 と罵らと泰勝の吐嗟とらり駭とるまは怯まると復せし声苛めく。這癖者何ぞい
 俺身も犯せ罪あり非除ちの罪ありとて封疆素も四州小豆りて二万五千の軍勢を
 俺君の知勇の家臣置かぬ。流寓の浮浪人よん使は立られんや憶ま汝の機
 機密を泄聞らるるものとて權と金とせんとて安命と詭る騙賊の兇胆其頭の術小

の乗る俺の目物とせん。短刀を引抜く勢は悍く破るんとせし引外れ小六を透す。透すは扇を打落しと打落し。怯む利を引肩被て。儘と投てければ泰勝の真柱の頭を撲り眼眩して。霎時に起る。响は駭く。芥田と記右衛門の這て。若黨奴隷も。何れを。胆を怯し。推續して散動々々と大家燦燦。うち登る。中は与記右衛門の。真先を杖登り。那為体。此も礙議。主人の冤家脱き。と名告けつ。腋挿の刀を抜て。高振る。敷を小六を扇を。受流し。踏込て眉間を。打悩む。吐嗟と叫。与記右衛門の憶。刀を。裏里と捨て。鈴釘弱腰。下高。蹴られて。俯走。二三間。是も柱を。回と撲して。向齒。三枚。摧け。流れ。血を。軀を。前。蘇枋の大。墮傾け。ら。小異る。の。噓。苦。し。む。声。悲。し。け。の。辟。未。朝。ひ。て。平。張。ら。後。れ。て。來。ぬ。若。黨。奴。隷。小六。が。本。支。胆。落。て。只。買。賣。と。罵。り。の。推。捕。綱。を。の。と。找。む。稀。も。な。り。け。り。登。時。小六。を。声。高。き。小。虎。狼。の。奸。黨。の。期。中。の。天。訓。と。知。る。や。俺。他。御。の。旅。

客もれ。義の與。親疎を擇。弱を助。強を折。冤を伸。怨を雪。りて。世の奸悪を。鋤。む。欲。き。宿。念。越。は。行。心。ぞ。け。の。れ。の。初。野。井。の。地。藏。の。頭。を。泰。勝。と。同。悪。る。杉。内。敵。介。生。拘。り。あ。ま。と。信。夫。が。所。在。守。忍。が。敷。れ。趣。通。て。泰。勝。が。惡。事。の。顛。末。他。們。が。招。了。す。る。露。路。頭。の。折。料。出。國。司。の。先。妣。の。廟。所。へ。參。詣。の。與。出。す。と。那。野。を。過。り。の。程。小。庵。泰。勝。が。罪。犯。と。恠。々。と。訴。て。山。勝。杉。内。敵。介。們。を。國。司。の。從。者。子。牽。渡。し。且。泰。勝。と。緝。捕。の。與。則。使。節。の。木。夾。を。預。賜。り。て。け。れ。牽。せ。ぬ。奴。馬。を。借。せ。り。り。騎。て。檢。査。使。英。虞。將。曹。們。の。先。を。走。る。方。僅。泰。勝。の。使。節。の。よ。と。示。す。れ。も。實。事。自。然。那。惡。僕。と。共。侶。の。よ。と。示。す。及。び。久。日。と。示。す。極。捕。して。主。任。を。投。獄。し。て。疑。ある。是。と。ぞ。英。虞。生。緝。捕。の。親。兵。們。の。程。遠。く。來。る。に。不。と。詞。争。く。告。示。し。て。懷。を。搔。撈。て。那。木。夾。を。合。せ。ま。せ。り。果。し。と。疑。ひ。も。國。司。家。傳。の。烙。字。あり。ゆ。実。と。なる。跪。居。く。若。黨。奴。隷。の。い。は。れ。る。泰。勝。并。小。と。記。右。衛。門。の。這。照。鑑。の。邊。て。手。合。ふ。身。を。起。



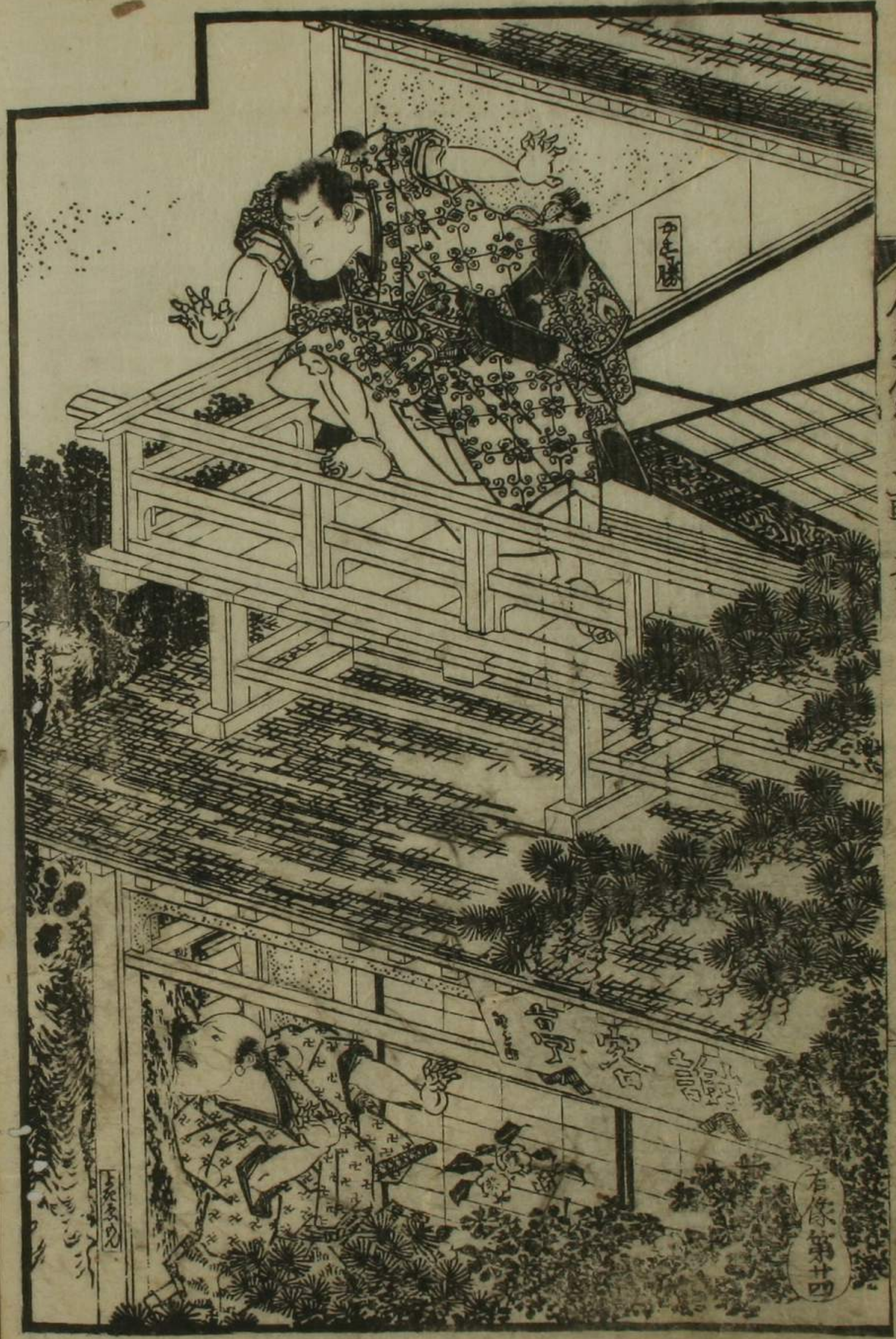
十六

小竹庄

世々も木の本のちんちんを山を
 三才のまじりてついでに
 三才別荘烈女飛樓
 ありてこゝに居るのまじり玉

十一

昌年五止堂印發



十七

文政傳第二冊卷四

右像第廿四

三才別荘

せよ。撲傷の疼痛勝れ、腰立立且羞て、俱顔底在の小六をこれぞとてを
 是秦勝從類們信夫を何処に隠る。快々這里におく来者。はな大家語言ひとく、仰
 ぶひふの件の妙今ゆふ推隱と何せん信夫。剛才這楚樓より落て舞ひたれぬ
 其の折の秦勝の。這處不在。其甚る故飲をの美。知を又注さうゆひつを。いふ小六を駭
 嘆と。已多く他多命俺の。這里来るとの。一瞬を命を預を想さうん。命運
 茲の端方飲亡散ると。打と来。俺の相せると。急せの美。いふ答を。中の西三名動く
 階子と下立て。信夫を蒲團に推包も。線り々推登と。小六の身邊に打居し。小六を
 蒲團と推包り。相れは定は呼吸絶る。死顔を色も変り。送末七才より。秋相
 別れも。年圓ても。有數系。残る幼仙良の。公致と。なるの。画餅も。なる再會の。甲
 斐も。はた推隱を。小六を獨り胆の。心は。俺御吉野に在り。時仙嬢の授
 ぬ。那仙丹の。一粒茶筵の内。在る。御家。庶言死せ。折這妙茶の。奇效。

起し。例の。且仙嬢の。示現の。残る。二粒の後々。用ると。あべ。宣ひ。甘。果。と。錯。を
 今又。茶を用ひ。信夫と。救ふ。と。あ。ん。と。尋。思。と。し。又。衆。人。か。ら。對。ひ。信
 夫の。這里より。落し。折窮所を。撲と。死。さ。も。那。身。受。た。傷。を。備。良。茶。用。ひ。食
 息。吹。返。さ。る。も。あ。し。俺。幸。不。腰。不。附。る。茶。筵。奇。茶。中。清。淨。水。火。を。鑽。掛。て。快。と
 来よ。と。吩咐。れ。若。黨。一。名。あ。る。と。て。一。個。の。奴。隸。共。侶。の。邊。へ。下。立。時。と。相。ま。件。の
 水。と。茶。碗。不。汲。ら。折。敷。不。載。て。茶。く。り。と。来。ま。け。小。六。を。備。不。措。と。信。夫。胸。を。拍
 試。ふ。聊。温。ま。り。れ。恥。て。一。粒。の。仙。丹。を。合。出。し。と。水。と。共。信。夫。口。小。伏。入。れ。仙。嬢。歎。禱
 きて。姑。且。胸。を。拍。程。信。夫。の。忽。地。吐。嗟。と。叫。び。眼。を。開。身。を。起。ま。蘇。生。の。大。家。驚
 び。奇。々。と。稱。た。る。中。小。六。を。飲。ひ。の。氣。色。面。顔。頭。下。信。夫。心。地。其。麻。公。年。節。を
 る。内。も。痛。の。扶。俺。の。國。司。の。使。中。秦。勝。們。が。做。善。惡。更。の。既。不。露。頭。及。び。く。呂。捕。向
 一。折。阿。娘。の。剛。才。高。は。る。落。て。身。故。り。り。と。夢。え。れ。れ。試。不。俺。感。得。の。仙。丹。あ。る。と。答。え。

きて用いし即效既小行心とて信る蘇生の執ひあり向娘の亦何もの故かつらその死を
 死と承んや奴の親の敷きれよとけまて知り身の眞愛苦も難に堪えぬり一の柳の那
 秦勝が箇様々々ふひ一の父の横死を稍知りての怨の方方るる敷も果さるる
 るの克を拉れて刺の身と細めて本意を遂げし挑れ身と汚されと必死の覚期を極
 めて這里より裁綱の間や落らんれれら後覚ゆり一然る有か其の即效再生は
 御洪恩何の時かとをなほの上の慈悲悲世の警敵を敷も果と現在の母
 歎に慰るるも欲の願の宜くよと痛む言葉の露をらた國司の使者の
 実の親の守傳に脇屋の公達小六九をまご知れも孝義を厚に烈女の誠心小六を不覚
 感涙の找むる人もふれれらとら紛らるる咳と共小妻の嗟嘆をその支の心安く阿娘の
 父を敷るるも亦秦勝が所為ふと若黨社内と記右の小密意を示し遠近前掛

射て殺し趣の今朝社内と敵介の備料も生物と他招きまの分明な途ゆく
 司許原へまのあま及之後が秦勝主僕の罪戾今や免る所必死刑を處せられ
 件の怨を雪入の日も傳てまの介る小衛も秦勝の愁を疑ひて主僕を及ぶ
 心地快のるまを諭其得便と信夫が歎ひを怨ひ小秦勝もまの疾程を虎狼も
 獨夫も獲られて檻に入るふ及の親もまの自是も亦死使の御庇とて慰めゆるり
 六々領にて那社内と相謀て守延を射て殺し記右のこの這里あんと逃る疾甚
 やと向信夫の衆人の答を等々指すと記右の那奴は主共侶は投擲され腰脚
 立をりゆり一の竟漏る天の羅網に任せられと報折る國司の難兵并麻吉は
 虞將曹の漸々走著てあま來會てけれ小六を則秦勝主僕の吉の趣信夫の自
 殺をを仙丹の奇效よめて甦生せらるる首より尾までその崖略を説示せ誰

感歎せざるは庶吉の笑は小六の對して恭に遅参の陪話をも依り去後方侍り。

第十八回 裡應外合法を濫る

理論方正枉を敬む

登時英貞將曹の小六が武勇の掙たを只顧の賞讃と然而泰勝まら對しては身
罪惡露頭より小六を使ふ立られる君命を宣示し。這別莊に在る所の奴婢の名を問人
數と糾きぬと記右衛門と共若黨二名奴隸の通て三名過然又婢妾も三名あり合
御の駭死怕れて避て那遠願れと二個漏れ召聚合て日屋の始末を頼る若黨奴
隸の泰勝が信夫を夏奪せ折拘らひさるものあり心機密を知ると信夫は隠措
く惡事と悟るこの事や信夫の主同惡の罪も免れ所を一個の餘りてと夥兵の下
知く男女齊一轉々と細ゆと更一個の雜兵を村長許遣と信々と吩咐けり因て千
蚊の村長の時と移ま莊客們は復興二機常と。這別莊に來れば將曹則村長

夫役の所要を宣示し木造泰勝罪の主僕俱に召囚る泰勝の父親政を御射
賀を赴て本宅の妻在るの。且這外別莊に若們姑且成と後の下知
を依り。この事を行つて。町寧なる。若竹興一機信夫を無せ又一機泰
勝も無せ。其細と掛て非常の備と。這宅と記右衛門と首とて數珠
奴隸の雜兵們は追立き小六と共別莊を去り氣を還り。介程に達小六則我
快の隨て成り。此も迷感する。この身は庶吉に従て又那馬の騎將曹們を
感先立と後より徐に拍せけり。この日よりと遐迹の士民を件のよと海を渡り
六が義胆豪俠を賞賛せしめ。名神風の伊勢の。後々不異。七
道は隱る。唐山の田仲王公劇子也。優を。皆其意を以けり。同話休却
説英貞將曹の達小六と共侶の信夫を勅。泰勝們主僕九名召捕て。氣の城
かる。豫て君命を宣示。有司裁名致各々。を受合て。先小六主僕を

借の旅舎案内とある。或の同注所に出仕し、泰勝主僕の罪惡と糾紛せしめ、登
 時、有職の毎、泰勝主僕及信夫、局内を召容れて先、泰勝と与記右衛門が惡事の顛
 末と鞠向ふ折山勝内敵介の細い、備に在り、既、他們が招了也、罪惡露頭の上、泰
 勝も与記右衛門も頼陳を、皆阿容々と罪伏、又、いなりも、さうけり、信而有司、信
 夫、對して日屬泰勝、合、誓、され、その身の始末、鞠、信夫、犯、汚、さ、け、下、も、自殺、す
 及、い、小、六、所、藏、の、奇、其、小、も、て、再生、なる、緯、の、趣、を、詳、さ、す、有、司、們、總、て、その、孝、烈、を、賞、て
 召、出、し、く、信、と、閉、籠、措、く、下、知、と、預、け、遣、け、り、小、六、の、ま、ま、と、知、り、か、く、と、是、程、の、次、の
 日、英、虞、將、曹、の、小、六、が、旅、宿、の、徒、然、と、訪、慰、せ、り、昨、夕、泰、勝、主、僕、六、名、い、と、禁、獄、せ、れ、り、
 并、泰、勝、が、父、木、造、内、匠、親、政、の、阿、射、智、の、作、業、出、役、の、折、を、れ、即、使、那、首、お、り、下、知、わ、り、
 召、出、し、く、信、と、閉、籠、措、く、下、知、と、預、け、遣、け、り、小、六、の、ま、ま、と、知、り、か、く、と、是、程、の、次、の
 日、英、虞、將、曹、の、小、六、が、旅、宿、の、徒、然、と、訪、慰、せ、り、昨、夕、泰、勝、主、僕、六、名、い、と、禁、獄、せ、れ、り、
 并、泰、勝、が、父、木、造、内、匠、親、政、の、阿、射、智、の、作、業、出、役、の、折、を、れ、即、使、那、首、お、り、下、知、わ、り、

先、目、前、を、允、さ、れ、ま、さ、る、依、慎、居、る、人、又、那、信、夫、の、母、親、老、樹、と、五、柳、村、の、長、鄰、人、們、を、召、
 寄、り、て、只、今、來、れ、り、即、使、他、們、返、さ、せ、る、の、死、下、知、り、さ、す、り、團、司、の、美、客、を、御、對、面、の、人、と
 仰、り、れ、が、昨、夕、の、感、冒、の、事、聊、不、例、ある、よ、り、の、ま、ま、の、ま、ま、及、れ、を、是、の、よ、し、報、知、し、と、安心
 させ、と、宣、は、せ、内、意、の、よ、く、來、つ、る、と、の、余、小、六、を、飲、み、て、其、の、慚、愧、を、お、し、信、夫、の、晩、生、が、義
 妹、也、那、養、母、老、樹、も、豫、示、せ、り、の、れ、び、び、と、送、り、て、那、首、に、到、る、飲、然、と、這、里、を、老、樹
 們、對、面、と、言、は、れ、け、れ、の、ま、ま、團、司、の、拜、見、せ、れ、れ、進、退、自、由、を、致、し、か、り、よ、り、と、伴、當、成、吉、を
 晩、生、を、代、と、し、信、夫、母、を、送、り、と、五、柳、村、に、遣、去、り、の、ま、ま、將、曹、異、議、及、び、信、夫、の、左、も、其、意、を
 依、る、べ、い、介、の、多、く、伴、當、に、信、夫、の、處、ま、で、お、り、便、宜、ある、人、某、の、先、退、か、て、の、ま、ま、五、柳、村、の、長、鄰
 傳、で、ら、る、の、ま、ま、い、の、ま、ま、と、期、と、推、し、と、告、別、と、立、向、け、の、登、時、小、六、を、廢、吉、と、身、邊、近、く、召、
 よ、り、て、目、今、夕、に、情、由、を、和、郎、の、信、夫、母、を、送、り、と、五、柳、村、に、赴、く、べ、い、勿、論、和、郎、も、知、り、老
 樹、の、刀、自、の、病、着、り、の、首、の、窮、厄、稍、解、る、歎、け、り、病、苦、を、忘、れ、て、這、里、ま、で、の、ま、ま、本

機密と示し、その筋有り司の獄卒も漏さず、人情を憐れ、
 泰勝を囚へ、毎小獄舎の食餌を餽ふ。府で問ひ、箇様をいふ。地助
 地助言まなげ。信り一程、泰勝が獄舎、悪吏の只那信夫の妻、年未嫁と父親
 改の勢、假りて忌憚らば、或人の妻妾と、梅溜し、或の民間の美女と、家奪奪を犯し、後不
 返せしもの、留めて妾をさるものあり。今番ののり、有司亦復泰勝を獄舎する牽
 引て、それらの虚実を鞫問せし、泰勝即便陳言する。今此鞫の趣、某一切覚む、怨
 みの、流言の、信の、身の非、知、言と飾らふ似れども、信夫をて故きて奪奪合せ
 なるあ、初其媒妁も、娶らんと欲せし、那親稻城守延が、飽ま、罵辱ゆる、口の憎
 さ、怒る、堪、正、然、若、當、那、内、記、若、那、吟、守、延、射、殺
 情、の、如、然、と、證、據、あ、陳、言、甲、斐、人、と、黙、止、へ、再

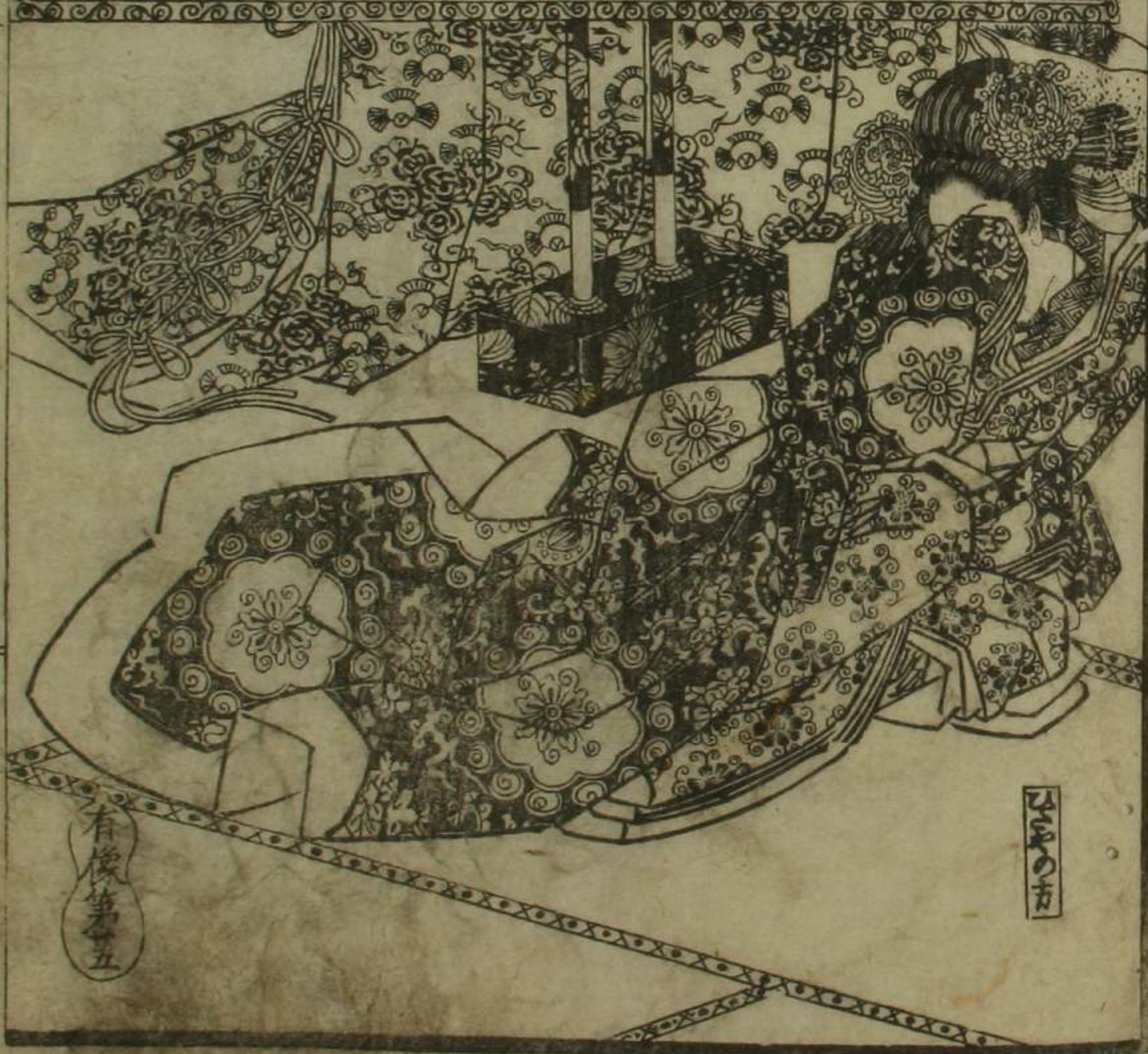
度、の、譴、責、已、の、陳、所、是、實、願、内、記、右、の、拷、問、の、詳、知、ら、其、漫、不
 罪、犯、と、命、惜、む、わ、ね、も、の、斧、就、親、交、妁、安、と、家、の、破、滅、不
 及、この、意、查、の、か、と、卿、言、か、頼、陳、と、哀、請、を、已、り、有、司、の、憶、を、暗、火、く
 俱、肚、裏、の、事、現、這、木、造、泰、勝、の、不、行、状、の、癖、者、も、父、の、二、の、權、家、の、姉、の、館、の、御
 寵、愛、大、く、偏、至、その、方、さ、る、俺、們、の、人、情、を、わ、り、今、の、便、宜、退、は、方、便、の、
 怨、ま、れ、身、の、上、及、び、せ、ん、要、を、わ、れ、と、各、々、言、出、せ、ど、小、人、の、尋、思、齊、一、理、を、枉、て、又、獄、舎、上、り
 内、と、記、右、の、事、出、し、と、方、僅、泰、勝、を、陳、言、の、趣、を、責、問、し、這、惡、僕、們、の、兼、依、の、事
 果、一、の、有、司、們、連、の、焦、燥、を、拷、問、數、刻、及、ぶ、程、内、記、右、の、事、出、し、と、方、僅、泰、勝、の、罪、を、
 心、の、首、伏、と、け、れ、の、日、の、廳、果、ま、り、信、而、有、司、の、再、斷、の、趣、を、言、ふ、泰、勝、の、罪、一
 等、と、降、せ、と、請、直、せ、と、滿、泰、の、主、諾、し、と、泰、勝、の、罪、を、死、す、と、信、夫、の、
 家、奪、奪、を、り、是、賊、情、に、似、れ、強、姦、せ、し、は、亦、罪、重、く、只、守、延、射、殺

殺し。杉内と記右衛門と市井棄て泰勝并に敵介の從僕五百板口健徳とて
 追放す。その餘はさる罪あり故去し免せしと速に下知せしければ以て泰勝の所引
 板屋の方の弟の禁獄せし日より。因執事真意伺て敢て召し出せし國司の
 立より病病と向てあつて慰めあると西三番及び一引板屋の方の弟の隨
 訴と何と口説きし。いれども知らぬの言はれ。現其調内奏し和漢國家の
 罰是より乱る。今も細故治習まのされ。満泰主。俱は真意便宜もあつ
 ひあつた。然も法度を私情に儘く。自由させし。摸稜の段。一旬あまの
 され。いけ有司們が。稟せし。の料をの欲お稱へ。敢て又尋思及び。疾
 内と記右衛門の首と勿れ。泰勝并に敵介の俱は追放せし。這時も連小六
 城内の旅舎に在り。國司對面せし。けり。明日飲立も程。英虞將曹と
 君の内意あれども。日毎小六を訪慰めて。時江上物。ひは鎖を日。又の時

武と講し。古今の治乱を論。きと。町寧。小六も國司の安否を問。病者
 稍瘥りぬ。と。沐浴せし。程遠から。沙汰あり。と。答る。長春の日
 慰難。鄰耳房の晩。夕の風。零果て。新樹。黄る。三月の天。下。西。日。あり。時。候。國
 司對面あり。と。將曹が。案内。立せ。走卒の。末。小六。姑。具。等。と。馳。て。准。備。の
 礼服。更。ぬ。て。柴。け。の。登。時。英。虞。將。曹。内。玄。關。出。迎。て。儲。の。席。に。誘。引。程。國。司。比。富。滿
 泰。主。の。心。腹。の。近。習。の。言。々。左。右。不。休。と。書。院。在。り。對。面。せ。し。る。あ。る。昔。縁。の。美。妓。以
 尖。賤。と。分。さ。る。鮮。と。相。譚。し。與。る。僅。小。賓。主。の。坐。隔。て。身。邊。近。く。招。れ。小。六。も。阿
 容。膝。と。枕。め。病。後。の。安。不。定。同。ま。さ。り。満。泰。の。又。い。ぬ。日。の。拵。を。原。本。以。て。快。も。對。面。を
 べ。り。小。憶。を。風。邪。小。冒。され。那。秋。び。舒。過。せ。し。急。慢。の。罪。と。い。ふ。就。て。木。造。木。不。泰。勝。が
 罪。過。の。る。月。疑。し。た。も。あ。れ。屋。虎。実。と。外。さ。す。の。情。中。に。發。覺。の。事。の。起。本。成
 原。小。稻。城。守。延。と。射。て。殺。せ。し。泰。勝。の。所。引。あ。る。若。黨。杉。内。と。記。右。衛。門。が。守。延。を。罵。り

是る怨ふとて遠近をなして殺して後主秦勝を吉てその身の功をせしむ。招了たてて白き
 任れは是秦勝が罪過聊輕に似る勿論信夫と豪奪と別荘に隠し措き非を
 せしめし。されども信夫の幸ひに犯されどとる不處せんとみづるも報有司に稟せしむる
 如し。給と云恰との重罪の兩個の若黨秦勝の元町をなして杜内と手記右の死刑に
 初は秦勝并敵介を杖罪に處て追放したる。その後をみるればか。と入るげに生る
 る。小六も所々冷笑ひて最憚りある。その御説とも骨を非除秦勝が吩咐で稻城守
 延を射させとも害せし。告一折那杜内を罪せし。允と俱に秘したる。秦勝が罪重
 君那晋の史董狐が趙盾君を殺せしと寫せし。その晋の靈公不徳の君ゆく
 その性酷く傲りし。又趙盾の晋の正卿その心操忠節即る。靈公諫れども靈公听さ
 樹影愾く以て殺さんとする。而三番及び六趙盾脱去多く欲し。晋の境を去りし時
 將軍趙穿と喚做その靈公と桃園に龍衣をこれ殺しけり。されども趙盾かり來る

位不復せし。晋の太史董狐が書して趙盾君を殺せしと掲て朝に示せし。趙盾を誣
 して殺せし。の趙穿と云。董狐の听を。あれと。子の晋の正卿を。これ
 とも境を出て及て國の乱を誅せし。子あを。と誰とのひけの孔子これを。董狐は是京
 良史とありけれ。法を書して隱を。宣子を。良大夫法の為。惡。又。惜多
 疆を出る。免。のれと。語。左傳。及史記。見。故事。秦勝の罪惡。異。其
 ともその理。是一致。君文武の名家。史。か。の理。感。素。故。ある。る
 依。飲。今。諫。六。日。昔。蒲。その。甲。斐。ある。法。度。君。の。所。亦。多。破。り。あり。
 民。馬。を。徒。也。孟。軻。の。境。入。る。母。小。國。の。大。禁。を。向。ふ。の。法。律。暗。く。罪。を。易。し。
 身。の。暇。を。賜。り。て。允。させ。の。と。告。別。と。立。せ。し。満。泰。主。の。慌。く。喚。返。さ。し。て。趙。盾。
 理。至。極。赧。然。と。汗。を。ま。最。恥。か。く。思。ふ。今。ゆ。せ。ん。と。任。の。飾。は。お
 似。て。鳥。許。え。も。秦。勝。が。祖。木。造。政。勝。の。後。村。上。天。皇。の。河。内。巡。狩。は。ま。折。陪。臣。を。



女小六再謁國司

二十

春後第五

女小六再謁國司

春後第五

軍功あり。その折先大入氣の右大臣の感状。今番の軍功。被着美入綴子孫。罪するも
 七代より赦以下。と寫れり。と豫りし。豫りし。とある。不泰勝。陳言所。と社内。与記。右。つ。後
 度。の。招。と。申。し。噲。合。考。つ。と。せ。後。の。如。く。不。計。以。免。の。事。と。亮。查。あ。れ。り。と。故。実。を。引。つ。當。坐。の
 陳。謝。の。小。六。と。名。付。藤。之。枝。を。御。証。餘。養。の。事。と。然。る。由。緒。あ。り。の。事。初。も。一。編
 捕。の。沙。汰。御。斟。酌。あ。る。を。既。に。林。禁。獄。せ。れ。て。後。昔。昔。の。田。緒。と。云。云。と。思。召。出。され。憚
 る。前後。不。都合。愚。意。は。る。と。免。れ。る。晚。生。他。御。の。孤。客。と。貴。を。犯。し。是。非。論。と
 又。票。を。送。り。も。る。信。せ。れ。ど。諫。と。免。れ。誠。と。免。れ。志。同。か。を。交。り。と。免。れ。依。心。と。る
 行。路。の。心。を。と。る。を。信。れ。且。泰。勝。の。罪。過。左。右。あ。れ。他。が。祖。の。忠。義。を。顧。み。恩。免。の
 議。を。加。え。る。信。夫。が。親。守。延。の。忠。義。を。思。召。れ。佛。の。守。延。の。忠。臣。と。文武。長。き
 景。義。の。國。司。の。免。改。名。入。京。都。將。軍。義。滿。の。諱。の。一。字。を。授。け。る。議。及。び。の。由。當。目
 稲。城。守。延。の。管。官。の。非。を。陳。し。面。を。犯。し。諫。稟。せ。外。よ。り。放。り。免。れ。他。御。去。り

二君の仕へを猶當國の逸民として非命の身故り。と復し。復し。を。免。れ。の。事。妻子。の。不。幸。且
 その。女。兒。の。二。親。を。孝。節。の。守。延。の。忠。信。夫。の。孝。の。後。々。美。談。あ。り。憐。み。多。く
 正。々。に。何。ぞ。と。民。の。父。母。を。願。う。稲。城。の。後。々。忠。と。賞。せ。れ。信。夫。が。孝。の。由。因。表
 去。て。善。を。勸。め。ひ。る。懲。ま。ま。と。惡。徒。走。り。亂。賊。子。怕。息。古。の。有。道。者。人。を。贈。る。由。言。を
 の。と。晩。生。弱。冠。鄙。陋。の。身。の。分。限。を。多。く。博。士。態。々。備。え。て。越。來。求。る。不。あ。成。悔。も
 先。に。世。の。同。朝。歴。仕。の。舊。縁。あ。れ。人。の。の。所。を。奉。て。忠。告。せ。ま。欲。す。の。罪。の。一。言。最
 不。敬。と。允。り。ぬ。か。れ。と。肝。胆。を。吐。く。明。辨。理。論。英。虜。將。曹。の。心。近。習。を。醉。る。如
 く。醒。る。如。く。且。感。且。沾。と。背。汗。を。流。け。る。中。の。滿。泰。主。心。内。編。怒。る。と。人。の。事。表
 より。長。者。の。の。る。氣。色。も。顯。さ。つ。と。听。果。て。の。趣。亦。是。理。の。信。夫。を。得。て。一。言。最
 然。る。の。事。賞。美。但。守。延。を。忠。臣。の。一。字。の。信。と。南。朝。北。朝。の。心。を。守。延。の。事。申。直
 り。の。の。足。利。氏。を。今。ち。不。思。嫌。は。る。事。義。滿。親。意。の。旨。を。表。し。諱。の。一。字。を

授られし是當家の面目なる守延獨これを否と衆議不愜ね罪ゆり。諭す小六も
 のま不愚意の御説と異へ鹿苑院殿。當將軍信濃。表裏目あつて折言約
 背くまゝ。次の御位小倉宮の即れぬ。君が御改名も甲斐あらん足利氏備約
 背はて宮と退けなむ。折國司も必怒り。那宮の久與斬と深く。墨高。甲兵
 三萬足利氏と戦ひぬ。その折名満の字と何処の措らん。返えん。返えん。
 志が依名告るも快く。後悔其首立す。世の胡慮あらん。然是も亦知る。志
 守延の美と。面と犯く。諫めけん。忠を義知る。最も惶を。む。後
 醍醐天皇。新田楠。軍功の大。劣り。高氏主。御諱の一字と賜り。高の字を尊の
 更て尊氏成され。那人志。叛た。終。南朝。臣た。折。名。尊の字を
 合復し。力及。後々。御失策。朽を。國司。心。前
 車後轍相續て。反覆の悔敬言。悟り。初。醉の

醒るが如く。羞る貌と更けて。高才子の妙論人の視聽と。驚と。後学。那稻
 城守延の後を立る。か。男見。争。何。和殿。今。封助。長
 留の。俸禄の請。依。然。俺媒。信夫。和殿。妻。是。守延の忠を
 賞。生諭。合笑。老。親。小。堪。然。と。と
 何。信夫。晩生。妹。寔。母。子。と。取。御。切。有。か
 泣。慚。愧。父母。送。體。禽。獸。比。願。國司。晩生。稻城。母。と
 隣。那。泰。勝。憎。信。夫。情。故。と。と。千。尋。海。測。と。と
 人の心の量るべ。か。物。体。と。美。御。免。被。且。晩生。統。為。竹。意。中。の
 鳥。願。内。武。者。修。行。と。筋。骨。と。銚。と。欲。外。の。相。預。り
 なる。木。夾。を。返。進。去。く。辞。別。の。思。ひ。久。く。快。身。の。報。と。強。面。推。辞。懐
 那。木。夾。を。合。茶。扇。載。て。近。習。遍。与。と。と。國。司。推。林。め。

其目その依措れよ。當地の在留願一か。今ゆふ力及ぶ。然るに俺足利家へ和殿の
 旅亭の障り多。下知せられんと請ん因てその木夾の間の和殿の懐中へ異目の證據を
 られよ。曩に南北西朝御合體を。折鹿死院の沙汰とて北畠の名家へ何れ彼
 され願れと天條の允志。と町寧まられ。第一の倉宮を。次の御位に即ちなるべらう。
 第二の當家子々孫々伊勢の團司たるん。第三のふと第三天は所望とも。報せられたれば今
 番和殿のうを兼引れんと疑ひ。ある舊縁と忠告の實義に答へ。志あるに必る推諱をひて
 と懇切に説示して又路費の資ふとて金二百兩二包を目錄に添て牽れ。小六を推諱と
 せ。此のべつられ。申させしむ。退去んと。亦別席に御食応のけり。登時小
 六の御目就て所望の一。後ある。何事と申え。又次の巻首に解分法を聴ぬか。



開卷驚馬奇俠客傳第二集卷之四終

心もいよ
 りりあて
 けり



心もいよ
 りりあて
 けり

